序　文

京都医療センター平成２５年度版アニュアルレポートが出来上がりました。

平成２５年度は国内において、東日本大震災の復興や原発の事故処理など多くの課題を抱えながらもアベノミクスの効果か、多くの企業で景気が改善し株価が過去最高を記録する等、日本の元気な姿が見られました。

しかし海外に目を向けると、依然として韓国や中国との関係においては、領土問題や歴史観の対立で首脳同士の会談も実現出来ず、中国の海洋進出はベトナムやフィリピンとの抗争を生み、極東アジアだけでなく東アジア全体に大きな課題を投げかけています。また、エジプトの政変やシリアの内戦、さらにはアフガンやイラクの政情不安により中東情勢が今後どのように進んで行くのか先が見えず、解決の道筋も見えていません。

５月はスノーデン氏の内部告発により、米国家安全保障局（ＮＳＡ）よる世界的規模でのインターネットの傍受が行われ、これに米国大手のＩＴ企業の殆どが協力していたことが曝露されました。米国とスノーデン氏のやりとりは、スパイ映画を観るような感がありました。米国が同盟国の首相のメールまでチェックしていたという話は、今のＩＴ社会の便利さの裏側を見せつけられ、テロ対策に対してここまで必要なのかと不安を感じさせる出来事でした。病院で患者のプライバシーを守るために個人情報の取り扱いに神経をすり減らしていることの意味が何なのかを、改めて考えさせられる出来事でした。

京都医療センターの平成２５年度は、２４年度の実績を引き継いで順調な成績を上げることが出来ました。医師や医療スタッフも増員となり、救急でのＨＣＵの看護師増員も順調に進みました。稼働率は計画の９割を維持し患者単価は最高となり、医業収益は前年を上回ることが出来ました。それに伴う経費の増加で収支差は２４年度より減少したものの、計画を達成しました。なお、本レポートより経営的な数値も掲載する試みを加えています。また、１０月から第二外来棟の建設工事が始まり２６年６月に完成し、新たに導入したＰＥＴ／ＣＴを含め予定通り運用を開始しています。

京都医療センターの大きな柱に救急とがん治療があります。当センターの年間入院患者の１／３は救急外来を経由して入院されます。また、がん患者登録は京都大学医学部附属病院・京都府立医科大学附属病院に次いで京都府内で３番目に多い病院となっています。これら２つの柱に加え、臨床研究の柱である糖尿病・内分泌代謝性疾患・生活習慣病等、地域医療の中心としての役割を担っています。

当センターが地域の基幹病院としての役割を果たしていく上においては、スタッフのたゆまざる努力と、病院を支えてくださる方々のご支援が不可欠であると痛感しております。皆様のご支援に感謝すると共に、今後も益々のご鞭撻を頂けますよう心よりお願い申し上げます。

院長　中　村　孝　志